

自己評価報告書

平成23年 5月11日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20720204

研究課題名(和文)

平安・鎌倉期における地方造瓦組織の復原

研究課題名(英文)

The Reconstruction the System of Local Roof-tile Manufacture in Heian and Kamakura Period

研究代表者

梶原 義実 (Yoshimitsu Kajiwara)

名古屋大学・文学研究科・准教授

研究者番号：80335182

研究分野：考古学

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：考古学 瓦 生産組織 手工業生産

1. 研究計画の概要

本研究は、平安期から鎌倉期にかけての、地方における造瓦組織のあり方、とくに、造瓦工人の移動や定着において、どのような事象が影響を与えたのか、また造瓦工人の管掌者や管理のあり方の変遷などについて、総合的な復原をおこなうことが目的である。

具体的な研究方法としては、まず全国の国府や国分寺、駅家などの官営施設や、また定額寺やその他の地方寺院の修造瓦など、当該時期に属する瓦のデータを取得していくこと、そしてそれを集成し検討することで、前項に記した研究目的を達成するための基礎資料としていくという手順になる。

とくに検討の対象としていくのは、平安後期～鎌倉期初頭の瓦陶兼業窯についてである。これらの瓦を実地に赴き資料を実見し、実測図を含めたデータを収集していく。当該期には播磨・讃岐・尾張などで集中的に瓦生産がおこなわれており、重点的に調査をおこなう。

特に本研究においては、瓦の文様の、また製作技法的系譜の追求をまずおこなう必要があり、必ず報告書に記載されているわけではない、細部の製作技法的特徴を、実地での調査で確認する必要がある。また、対象が全国

におよぶため、各地の発掘調査報告書の閲覧を含め、地方での文献調査などもおこなう。

2. 研究の進捗状況

平成20年度は、尾張地域(猿投窯東山地区・知多)・播磨地域(神出・魚住)・讃岐地域(十瓶山)の資料調査をそれぞれおこない、資料の図化・データ化をおこなうとともに、調査担当者などとの意見の交換をおこなった。

また、東海地方に関しては、生産体制についての論考を著し、発表をおこなった(梶原2008「東海地方における瓦生産」『日本考古学協会2008年度愛知大会研究発表資料集』)。消費地での状況や、詳細な年代観などを含め、まだ研究途上ではあるものの、猿投・知多での瓦の年代観は、併焼する山茶碗の年代観とも深く関わるものであり、年代や管掌者を含めた当該地の窯業生産全般を考えるにあたって、有効な問題提起がおこなえた。

平成21年度は、平安時代後期における大規模な瓦生産地のうち、とくに尾張地域の八事窯について、その供給先のひとつとされる相模地域(鎌倉永福寺・三浦

満願寺・伊勢原市石田遺跡群など)の資料調査をおこなった。

また、梶原2010a「古代寺院と行基集団一和泉地域における奈良時代寺院の動向と「行基四十九院」一」(『名古屋大学文学部研究論集』167)において、平安後期に和泉地域において、瓦をもちいて造営修造がおこなわれた寺院の多くが行基関連寺院であることから、この時期に行基の顕彰の一環として、大規模な造寺活動がおこなわれた可能性を示唆した。さらに、梶原2010b『国分寺瓦の研究一考古学からみた律令期生産組織の地方的展開一』(名古屋大学出版会)においても、尾張や讃岐を例に、平安後期の造瓦体制の変革について触れた。

平成22年度は、前年度に資料調査をおこなった相模地域の尾張産瓦について検討をおこなった。その結果、尾張窯瓦との同範認定が難しく、また丸平瓦のみの出土しかない例もみられる中で、肉眼観察のみから東山窯産であると比定している現況では、今後、当該期の造瓦組織や瓦の需給関係を复原していく研究の土台とはなりにくいという結論に至った。そのうえで、これらの瓦に対して、胎土分析をおこなうことで、科学的に立証することが、研究の前提として必要であると考えた。そのため22年度予算の一部を使用し、生産地側の尾張東山古窯跡群出土瓦の胎土分析をおこなった。

3. 現在までの達成度

上記のとおり、研究計画のうちおもに尾張産瓦については、その系譜関係や年代論、胎土分析など、研究代表者によってかなり研究が進展しており、それらのうちいくつかは、梶原2008や梶原2010など、論考や学会発表としても提示されている。

播磨や讃岐についても資料の実見をおこなっており、また近年上原真人氏らにより論考が出され、研究の進展が見受けられる。

4. 今後の研究の推進方策

平成23年度は最終年度であり、研究計画としては、

① 消費地側の胎土分析をおこない、その成果を公表することで、尾張産瓦の需給関係を確定すること。

② そのうえで、尾張を中心とした平安～鎌倉前期の造瓦組織のあり方を复原し、さらに近年急速に研究が進んだ、同時期の讃岐や播磨産瓦の事例と比較検討し、当該期の瓦生産のあり方について考究する。

以上のように本研究を推進していく予定である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計11件)

1. 梶原義実2010「古代寺院と行基集団一和泉地域における奈良時代寺院の動向と「行基四十九院」一」『名古屋大学文学部研究論集』史学56、69-86頁、査読有

2. 梶原義実2011「国分寺の諸段階一造瓦組織からの考察一」『日本史研究』583、1-19頁、査読有

〔学会発表〕(計8件)

1. 梶原義実, 国士舘大学シンポジウム『国分寺の創建を読むⅡ一組織・技術論』「国分寺と造瓦」, 国士舘大学, 2008年10月4日

2. 梶原義実, 日本考古学協会2008年度愛知大会分科会『東海地方の窯業生産』「東海地方における瓦生産」, 南山大学, 2008年11月9日

〔図書〕(計2件)

1. 梶原義実, 2010『国分寺瓦の研究一考古学からみた律令期生産組織の地方的展開一』名古屋大学出版会、339頁